甑島の地理

小薗榮

我が國の最も緊急な問題は人口食糧問題なるかの如く思はれる。昭和新春から官民、皆これに努めてゐる。勿論、人口問題は獨り今日に起り、而して重大に考へるに至つたのではない。太古山に獸を狩り、河海に魚貝を漁りすることのみで生活した頃に於いても、これに類する厄介千萬な問題があつに違ひない。

大正十五年の秋、吾々は薩摩郡の村別人口密度分布圖を作成した時郡内でも人口密度の高い事に驚いたのであつた。それ以來、甑島の話を聞く毎に、漁村甑島の生活の不安を思ふこと一切でなかつた。今夏、一週間の豫定で同島を見んとしたが、再度の失敗で、數日を得たのみで中止せざるを得なかつた。故に、人口問題研究の參考報告をなすを得ないが、一文を草して諸先輩の指導を乞ひ、他日のより精確なる調査をなさんとするものである。

一、地形・氣候・交通

九州島の西南海上、九州山脈・西南端の海中に出沒して一列の島をなすのが甑列島である。上甑・中甑の二島及び下甑の北東部は中生層に屬し、下甑の西南部は深成岩の露出せるものである。全島、沈降海岸地形の特色を示し、現今は平衡狀態（註1）にあるものゝ如く、往古の谷は溺れて江灣をなし、山脈は續いて脊梁をなし岬をなした。岬は絶えざる波蝕によつて海崖をなし、これ等の岬が削られて出來た砂礫は、波浪、沿岸流によつて灣頭に運ばれ、小流の流下する泥砂等と、平良（タヒラ）・江石（イシ）・藺牟田の如き礫濱手打・中甑の如き砂濱を形成して、人類に住居の好適地を與へた。（註2）灣頭に居を占めた先人は、後方の山地を踏み越えて、他の部落と交通

するを得なかつた。山の峻と棘木と、海崖とは舟航の發達する近代まで、小さな孤立的な社會を存續せしめた。（註3）

註1　五萬分一、里村・中甑・青瀬・手打、及び海圖二〇七號及二〇九號を參照されたし。然らば中生層の砂岩・頁岩を切れる波蝕臺の幾個かを見得るであらう。其の他確實な證とはならざるも礫塘に抱かれたる海鼠池、陸繫島たる里村遠見山・手打港を抱く島及び上甑島より中島・丸山島を往々中甑島に至る間の海峽は或は續き、或は切れて、滿潮時に小和船を通ずることも容易ならず。

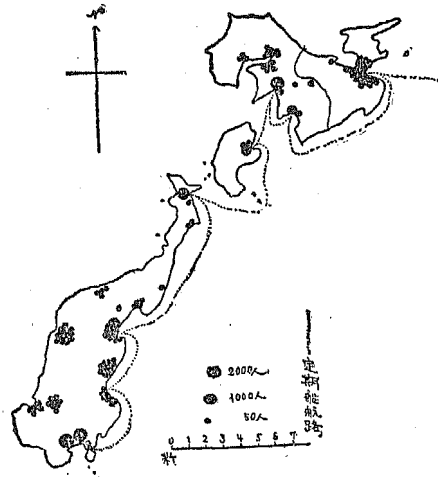
註2　砂濱が最初の人類居住地となれりと云ふにあらず、當島に始め移住したるものは恐らく幾分か人智發達して漁業をなし得るに至れる者ならん。詳細は未だ知らず。予の渡島したる昭和二年夏には手打部落の西南部畑地——人家の庭前——砂丘ならん——に井戸掘りの際に目塚發見せられ彌生式土器ならんと云ふものを見たり。其の後のことは不明。——此の項御指教を乞ふこと切なり。

註3　社會と云ふも只單に部落と云ふ程の義にて常識的に使用したり。

手打より、辛じて通過し得る小徑を取り、——勿論この外に廣き道なし、人力車・馬車・自動車なし。私の聞き知る所では、薗牟田は下甑にて最も生活豊かなる部落なれど、道路は巾二米位が最も廣く、石塊多く、下駄の損すること夥し。而して自轉車・人力車・馬車一臺もなし。——山を越して一時間にして片野浦に着く。當地は周りは三、四百米の高山を負ひ、僅に西方濱田によつて海に通ずる他の部落との交際近時迄よく行はれず、他部落の者との婚姻を排斥する風あり。住民の骨格、人相は奄美大島のものに類する。

平地は里村・手打を除くならば甚だ少く、人家は海岸の一方波靜かな灣頭に尺寸の地に密集して建築されてゐる。私は薗牟田の港に碇泊せ

第一圖

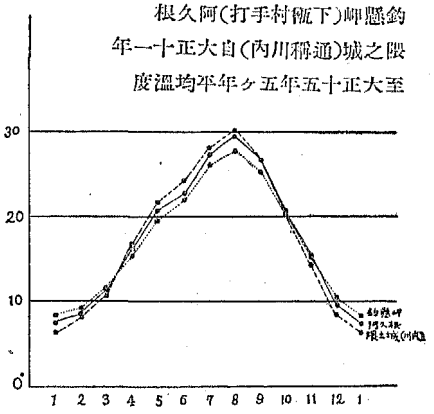


人口分布圖　太正十四年十一月一日

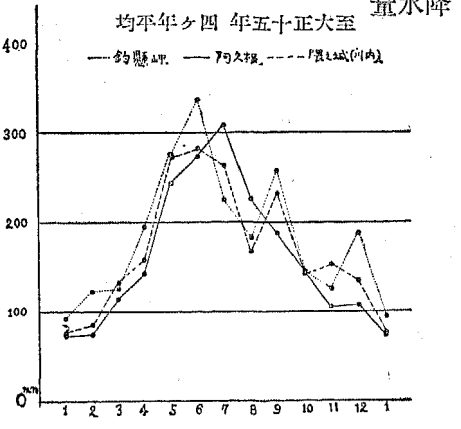
んとする船上から、二百米の山頂まで數百級の階段狀の甘藷畑を見て驚いたのであつた。

本陸との交通は三隻の小汽船によつて、串木野島平港と結ばれてゐるが、風浪激しき時は缺航多く冬季の交通は甚だ不便である。（註1）（註2）（第一圖）（第一表）

第一表（A）



第一表（B）



註1　西北風の卓越せる爲に、西北岸は海崖百四、五十米に及ぶ所があり、砂濱を見ることを得ず、而して漁船の集まる所、人口の集中する所は皆南東岸、若しくは卓越風を防ぎ得る所に存在する。薄牟田・中甑・手打の如し。川內瀨々野浦は西岸にあれども、高き海崖の上に位し、漁港としては遙に劣れり。

註2　昭和二年十二月普選第一回の鹿兒島縣會が開かれた時甑島選出第一回の縣會議員中村氏は、當局の甑島を繼子扱にすることを痛擊し、當局者に直接視察して貰ひ度いが、小さい船では命が惜しいだらうと皮肉つた。然し局外者から考へても貧弱なる交通機關は研究・視察にも故障を及ぼすこと甚大なるを思はしめる。僅か三十粁たら

ず隔てられてゐるのだが言葉が違ひ、文化の異なること甚だしい。本陸のことを内地と云ひ、島のことを田舎と呼び『島で勉強するよりも、内地に行つて遊んだ方がよい』と私に話された。島の人は如何なる心持でこんな事を吾々に話すのか、私はよくわかつた。

二、農業・人口密度

第二表に畑とあるは概ね山側に階段狀に作ら

第二表　人口—大正十四年十月一日　其の他は昭和元年鹿兒島縣統計課調

村名	面積	人口	一方粁に付き人口	一世帶の人口	耕地全面積に對する歩合	農家一戸に對する田畑	田	畑
	方粁	人					反	反
里	一七・四	三、〇一七	一七二	四・六	4.1/1000	〇・二	二三・四
上甑	三三・七	五、五〇九	一五四	四・七	2.0/1000	〇・七	三・〇
下甑	六八・四	一二、七四五	一七二	四・九	2.2/1000	〇・九	一・八
薩摩郡	九六五・四	一四七、三九七	一四九	四・七	10.2/1000	11.3/1000	4.3/1000	8.8/1000	4.2/1000	四・七	五・〇

れたもので、蘭牟田の如きは人家の後方から殆んど山頂まで—海拔百五六十米—數百級の細長に畑がある。八月、九月の頃はすべての畑は甘藷を植えられてゐる。これが常食であるのだ。冬には麥にかはるのだ。畠の周には百合が植えられ、初秋には一種の景觀を呈する。これは區有であり、勝手に取ることを許さず、一括して米國向の貿易品とされるのである。（第三表）

是の如く狹き土地に多くの人口を容れ、住民は生活難に襲はれ、度々の飢饉になやまされる火事、暴風雨の爲に食料の欠乏を來し、肝屬郡高山村・熊毛郡種子ヶ島へ多人數、移住さした事も一切でなかつた。註1

註1　下甑村史によれば明治十九年及二十年に種子島へ送れりと。種子ヶ島の人の話を聞いても甑島より移住せる者多しと。これ等の島の間には往古より交通ありしものならん。此の項未だ調査不十分なれば諸先輩の御指導を乞ふ。

三、漁　業

沿岸漁獲を主とし、手打附近の漁民が冬季串木野島平港を中心として鰯漁に從事するを特例とする。漁船は動力を有する者殆んどなく、半農半漁の狀態を出でず。（第四表）（第三圖）

蘭牟田　土地狹く、平地は僅に數町の田地を殘すのみ人家密集する。

後方の山は急傾斜なるも階段狀の畑として芋・麥を作る。街路は狹隘にして石礫多く、車馬を通ずる由もなし。礫濱にして、天候惡しき時は風浪すさまじく海岸に高さ約四米の石堤を築いて海浪の襲擊を防ぎ、漁舟は堤を越して街路に引き入る。

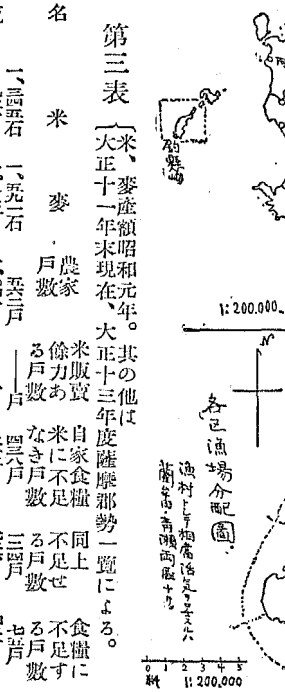
全島第一の漁獲地にして、漁場は夜萩漁場より吹切漁場に至る一帶にして、獅は年額四乃至十五萬圓に及ぶ。スルメイカ、鰮は薗牟田沖最も多く、鰮の盛漁期には若きも老も、男も女も、出漁し、年額五萬圓以上に上る。又、共同作業として附近の淺瀨一帶を掃除して、テングサ、フノリの養殖に努む。女は平常は畑を耕し、水を汲み、豚、山羊を飼ふ。水は少く、小流の末とも思はるゝ所に井戸を設けてある。

當地は幕末時代より重視され、番所があつて、外船を監視した。

附記　1　甑島航路

天草島牛深に起り、阿久根・串木野を經て、里、江石、中甑、平良、薗牟田

第二圖



第三表

〔米、麥産額昭和元年。其の他は大正十一年末現在、大正十三年度薩摩郡勢一覽による。〕

村名	米	麥	農家戸數	米販賣餘力ある戸數	自家食糧米に不足なき戸數	同上不足せる戸數	食糧に不足する戸數
里	一、三四五石	一、九一一石	五六一戸	一	四八戸	三四戸	七戸
上甑	九五一	一、八八五	一、〇四一	一五〇	三三五	七六六	四二一
下甑	二、八二〇	二、三〇〇	二、四四〇	三八五	九二五	一、九二五	
薩摩郡	一六〇、三三一	四四、八九三	二二、一四二	八、七七五	八、九八四	六、〇六三	四、五六八

第四表

〔昭和元年縣統計課調、不詳なるは同統計は第二十位まで擧げあるに付き、それ以下のものにて記しなきもの下甑は漁業從業者沿岸漁獲高にて第一位、漁船數にて第三位〕

村名	漁業從業者	縣全體に對する比	漁獲高	沿岸漁業漁獲高	同上縣全額に對する比	漁獲製造高	漁船數
里	二、〇二二人	〇・〇四〇	九八、六四六圓	同上	〇・〇一三	不詳	不詳
上甑	二、二七〇	〇・〇四五	九三、五〇一	同上	〇・〇一〇	不詳	不詳
下甑	四、八四七	〇・〇六六	一三三、三九二	同上	〇・二一三	八六、八四六圓	三四〇隻

長濱、青瀬、手打に至る。――串木野を正午過ぎ發し、手打に着くのは午後の十時である。船脚まことにのろし。小蒸氣船三隻。船賃は恐ろしく高し。

2、生活の一つ

私は今夏八月十九日手打を發し、片野浦に至り、飲まず食はずやつとの事で瀬尾(青瀬)に到着した。片野浦に店の一つ位はあらうと中食を用意しなかつたのが失敗だつた瀬尾に驟雨の中に着いたのであつた。腰をかけて休む樣な家は見つからない。やつとのことで小さい店が見つかつた。菓子はない。小さい梨があつた。硬くて齒がいたい。夕方になつて子供が瓶を持つて來る、ザル(籠)を持つて來る。そして鹽十錢、砂糖五錢、醬油一合、ローソク一本、石油一合等と買つて行く。今日お母さんが賣つて來た魚代で買うて行くのであらう。

3、サンゴ

産地は北緯三十一度十八分三十秒、東經百二十九度四十四分に位する津倉(銃良島)及び其の西南、宇治島で毎年三月より十月まで、手打港を根據として採集された。明治二十八年頃より大正十三年頃まで作業をなし、現在は中止してゐる。

土佐・五島の發動船が集まり、天氣が良好であるならば一週間乃至十日間位づゝ作業し、最盛期の明治四十年頃は船數四十を越え年額四十萬圓に上つた。現今は市價の暴落と産額激減の爲に收支償はず、中止するの止むなきに至つた。

江南再遊

藤田元春

一、排日の聲

昭和三年十二月二日午後一時、長崎丸はチョコレート色の江水を蹴つて、堂々として吳淞に入つた。こゝから十二哩黃埔江を溯るのである

狹くて淺い江中に無數の大艦巨舶が入つてゆくのであるから浚渫の工事は絶間なしに行はれてゐる。今も吳淞港頭左岸に泥を掬ひ上げて、方四五町の干田がつくられつゝあるのも面白い。